

今月のコンテンツ

- 参画学会の年次大会開催のご報告
 - 第77回日本公衆衛生学会総会（福島）
 - 第66回日本職業・災害医学会学術大会（和歌山）
- 今月のお知らせ
- 日本医学会連合フォーラム「医師の働き方改革を考える」

参画学会の年次大会開催のご報告

第77回日本公衆衛生学会総会（福島）報告

福島県立医科大学医学部公衆衛生学講座

やすむら せいじ
安村 誠司（会長・教授）

いわさ はじめ
岩佐 一（講師）

おおらい まさつぐ
大類 真嗣（講師）

第77回日本公衆衛生学会総会は、安村誠司教授（福島県立医科大学医学部公衆衛生学講座）を学会長

として、2018年10月24日～26日に、福島県郡山市（ビッグパレットふくしま）を会場に開催されました。



日本公衆衛生学会は、会員数が約9,500人を超え、現在も増加傾向です。本学会は多職種で構成され、職種別では医師と保健師がもっとも多いです。会員増加の理由として、公衆衛生に対する関心の高まり、と考えるのですが、本一般社団法人 社会医学系専門医協会の構成学会であり、社会医学系専門医・指導医になるための入会が少なからずいるためと推察されます。

さて、第77回総会では、上述の通り、

多職種の方に、現在、そして、将来の備えとして、有益な機会となるように、企画しました。特徴としては、まず、今まで一度もメインテーマにならなかったことがない「災害」を取り上げました。2011年3月11日の東日本大震災、その後の東京電力福島第一原子力発電所事故は、従来の公衆衛生では対応が困難な状況でした。その後も、2014年に広島市土砂災害、2016年に熊本地震、2018年に西日本豪雨災害、北海道胆振東部地震が発生し、災害対応（危機管理）は公衆衛生活動の重要な柱の一つであることが改めて認識されたと思います。そこで、メインテーマ「災害」に合わせ、私の学会長講演は、「ゆりかごから看取りまでの公衆衛生～災害対応から考える健康支援～」としました。また、特別講演は、田中俊一先生（飯舘村復興アドバイザー／前原子力規制委員会委員長）に「福島第一原子力発電所の事故の概要、および福島の復興について」を、有本建男先生（政策研究大学院大学／科学技術振興機構）に「国連・持続可能社会目標（SDGs）と公衆衛生への期待」を、メインシンポジウム1は「福島住民に

おける甲状腺被ばく線量推定の方法論・現状と課題」、同2は「原子力災害と公衆衛生—地域の復興の現状と課題—」、同3は「福島県甲状腺検査の現状の紹介と今後の方向性に関する論点」、同4は「住民の健康をまもる保健師活動～災害後の保健活動から得たもの、今後の活動へつなぐこと」としました。

次に、メインシンポジウム以外のシンポジウムは全て公募とし、必ず男女、及び、公衆衛生専門家がいること、また多くの会員に役割を担って頂くため、一人の担当は2回以内を条件にしました。

第三に、学会の国際化への対応として、English Session（口演とポスター発表）を創設しました。

最後に、「企画はしても、企画のみで終われば良い」との考えから「緊急企画シンポジウム」を準備した点です。本年7月に西日本豪雨災害が発生したために、急遽開催致しました。ここでは、初めて正式に活動した「災害時健康危機管理支援チーム」（DHEAT）をテーマにしました。

会員以外でも参加できる企画である市民公開講座

1は、箭内道彦氏（クリエイティブディレクター、東京藝術大学美術学部デザイン科准教授）による「I love you & I need you ふくしま」、市民公開講座2は、大和浩先生（産業医科大学）と中村正和先生（公益社団法人地域医療振興協会ヘルスプロモーション研究センター）による「職域・地域におけるたばこ対策の推進—受動喫煙対策および新型たばこに関する最新情報を中心として—」を開催し、後者は日本医師



会認定産業医講習会として位置づけました。

なお、本総会では、自由集会の企画として、「社会医学系専攻医・専門医・指導医の情報交換自由集会」を 19:05 からの遅い時間からの開始となってしまいましたが、今中雄一教授（京都大学大学院医学研究科医

療経済学分野）を代表世話人として開催して頂き、115 人の出席があり、盛況であったとのことでした。

このたびは、本ニュースレターに第 77 回日本公衆衛生学会総会の報告を書かせて頂く機会を与えてくださった大槻剛巳先生に心から感謝申し上げます。

参画学会の年次大会開催のご報告

第 66 回日本職業・災害医学会学術大会を終えて

独立行政法人労働者健康安全機構 和歌山労災病院

南條 輝志男（会長・院長）

小林 康人（副院長）

仲澤 妙美（看護部長）

第 66 回日本職業・災害医学会学術大会を 2018 年 10 月 20 日（土）・21 日（日）の 2 日間にわたり、和歌山市のホテルグランヴィア和歌山にて開催した。今回のテーマは「勤労者医療・災害医療を支えるチーム医療と地域連携」とし、勤労者が抱える様々な疾病への対策や治療と就労の両立支援をはじめ、労働災害を含む災害医療など幅広い領域において、最新の医学・医療の情勢を踏まえて、多職種の視点から様々な課題について検討したいと考えた。本学術大会に多数参加していただき、勤労者医学・災害医学の更なる発展に寄与できるよう、また、日本医師会認定産業医研修（生涯研修）10 単位をはじめ各種認定単位取得が可能となり、多くの職種の方々が最新の勤労者医学、災害医学におけるチーム医療と地域医療に関する勉強が十分にできる内容となるよう心がけた。

会長講演では、「勤労者における糖尿病対策と災害対策—紀州の先人に学ぶ—」と題して、会長の 48 年に



わたる糖尿病に関する臨床と研究活動の軌跡を述べるとともに、紀州の偉大な先人として医聖・華岡青洲先生、世界的な生化学者で和医大初代学長・古武彌四郎先生、天才博物学者・南方熊楠先生の共通点（自然を注意深く観察することの重要性）などについて紹介した。また、紀州における過去の大災害の一つである安政の東海・南海地震（1854年）で多くの人命と村を救ったとして国定小学国語読本（1937～1947）に「稲むらの火」の主人公として紹介された濱口梧陵の神対応について報告した。さらに、現代に至るまでトルコの教科書で教え継がれ、最近日本とトルコの合作で映画化された、明治23年（1890）9月16日の紀州串本近海でのトルコ軍艦エルトゥールル号の座礁、沈没事故についても報告した。この中で、乗組員の救助・救命活動に当たった3名の医師（川口三十郎、伊達一郎、松下 秀先生）と村民たちの素晴らしい連携による救護活動にわれわれも学ぶべきとして紹介した。

特別講演1では、がん専門医として米国で活躍中のテキサス大学MDアンダーソンがんセンター教授の上野直人先生に自身の体験から米国におけるがん患者の就労を中心に講演して頂いた。その中で先生は患者を治療する立場にある腫瘍内科医ががん患者になった場合に、仕事現場において同僚に対し、いかに自分の病状を公開するか、一方の雇用主はいかにがん患者にとって仕事のしやすい環境を提供できるかが重要であると述べられた。そして、一日も早く就労現場における差別のない社会を実現する必要性を強調された。特別講演2では、独立行政法人労働者健康安全機構理事長・有賀徹先生から「高齢化の進展と労働者の健康管理ー独立行政法人労働者健康安全機構の役割」と題して、高齢者を含めた総労働力が安全に安心して展開できることが経済活動や社会保障制度を維持するうえで重要であり、これに寄与することが当機構の

大きな役割であると述べられた。

教育講演としては、和歌山県立医科大学理事長・学長の宮下和久先生による「日本における手腕振動障害対策のこれまでとこれから」、当院副院長から大学教授に抜擢されたお二人（昭和大学藤が丘病院脳神経外科教授・寺田友昭先生と関西医科大学総合医療センター整形外科教授・安藤宗治先生）をはじめ13題のご講演をいただいた。シンポジウムとしては16テーマを取り上げ、いずれもシンポジストの素晴らしい発表と熱心な討論が展開された。また、労災疾病等医学研究・両立支援報告として18題、一般口演として105題のご発表があり、活発に討論いただいた。

本学会の準備に当たり、最も力点をおいたのは勿論、プログラムの構成であるが、より多くの会員の皆様に参加いただくために、紀州・和歌山らしさを表現できるよう、様々な工夫を凝らした。紀州・和歌山は、世界で初めて全身麻酔を成功させた医聖・華岡青洲先生の出身地であり、学会前日の理事会前に彼の住居・病院・医学校であった春林軒と、そこからほど近いウォークインの出来る国宝「根本大塔」を有する根来寺の見学を組み入れ、理事会はかつて夏目漱石が講演を行ったという国の重要文化財に指定されている旧和歌山県議会議事堂（一乗閣）で行った。学会初日夜の会員懇親会では南紀勝浦漁港直送の生マグロの解体ショーを行い、会員の皆様に和歌山ならではのグルメを味わっていただいた。

本学術大会には一部招待者も含めて約800名のご参加を頂いた。このように第66回日本職業・災害医学会学術大会が無事、盛会裡に開催できたのは、会員の皆様、協賛・協力をいただいた企業・団体、そして約1年間にわたり準備にかかわった当院職員の皆様のご尽力の賜物であり、ここに厚く御礼申し上げます。

今月のお知らせ

平成 30 年度研修プログラム統括責任者連絡会議について

【平成 30 年度研修プログラム統括責任者連絡会議】

社会医学系専門医協会が示す「専門研修プログラム整備基準」によると、研修プログラム統括責任者は社会医学系専門医協会が開催する「統括責任者研修会」を修了していることが求められております。このたび、この「統括責任者研修会」として昨年度に引き続き標記会議を開催致します。参加申し込みをいただいた先生方には、当日も活発な意見交換などよろしくお願いたします。

研修内容等の詳細は、【平成 30 年度研修プログラム統括責任者連絡会議のご案内】をご覧ください。

【日程および開催場所】

●大阪会場

日時：平成 30 年 12 月 24 日（月・祝） 14:00～17:00

場所：大阪大学中之島センター 3 階 304 講義室
〒530-0005 大阪府大阪市北区中之島 4-3-53

<https://www.onc.osaka-u.ac.jp/others/map/index.php>

●東京会場

日時：平成 31 年 1 月 13 日（日） 14:00～17:00

場所：東京大学 医学部教育研究棟 13 階 講義室
〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1

[https://www.u-](https://www.u-tokyo.ac.jp/campusmap/cam01_02_09_j.html)

[tokyo.ac.jp/campusmap/cam01_02_09_j.html](https://www.u-tokyo.ac.jp/campusmap/cam01_02_09_j.html)

第 1 回専門医認定試験について

日 時：2019 年 8 月 18 日（日）10 時～17 時

会 場：日本医師会館（東京都文京区駒込 2-28-16）

方 法：午前 筆記試験 / 午後 面接試験

筆記試験：選択式問題 60 分

面接試験：個別面接 15 分、グループワーク 60 分程度

参考様式：実践レポート（個別面接で確認する予定）

試験範囲：基本プログラム 7 科目

参 考：E-ラーニングの内容に準拠

受 験 料：20,000 円

対 象 者：「今後の経過措置専門医・指導医について」（お知らせ 2018/03/19）をご確認ください。

申込受付：2019 年 5 月中旬（予定）（申込受付、実施要領等の詳細は決定次第、ホームページに掲載いたします）

そ の 他：経過措置による専門医認定試験の受験（専攻医に登録されないでの受験）を希望されている方は、受験資格事前審査についてもご確認ください。

参加報告

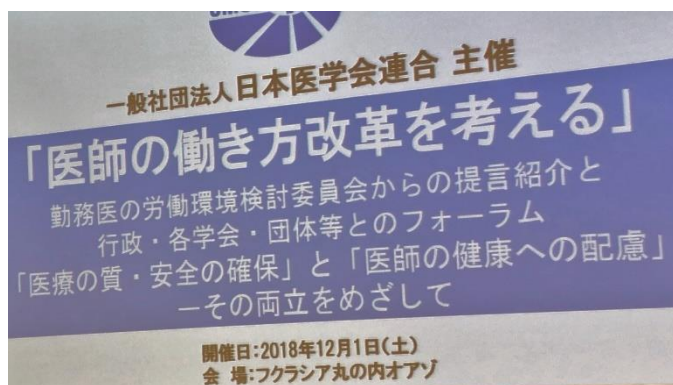
日本医学会連合の「医師の働き方を考える」フォーラム

社会医学系専門医協会 理事

日本衛生学会 理事長、川崎医科大学衛生学

おおつき たけみ
大槻 剛巳

2018年12月1日、フクラシア丸の内オアゾで、日本医学会連合主催の「医師の働き方改革を考える」というフォーラムに、日本医学会連合の一員である日本衛生学会の立場で参加してきました。



門田会長のご挨拶の後、総合司会は、我々の協会にも設立時以前より支援をいただいています岸玲子先生（社会学系副会長、労働環境検討委員会委員長）の司会で進められました。

部会の委員には、社会医学系の立場の先生もいらっ

しゃいますし、勿論、臨床系の先生方も。また、後半のパネル・ディスカッションでは、厚生労働省の方をはじめ、内科系、外科系、産婦人科の学会を代表される先生方、さらに医学会連合内での男女共同参画を検討する委員会からの発言者も加わり、それぞれの実態から何をすべきかという論点、さらには労働環境検討



委員会が「案」として表明された提言に対するご意見など、沢山のコメントが寄せられました。また医師不足あるいは偏在、診療体制、タスクシフトやタスクシェア、PA (Physician Assistant)、育休中の勤務時間の再構築など、多くの課題が提示され、しか

し喫緊の課題であることも改めて認識されました。

近くの写真添えて、医師一人ひとりが、真剣に向き合わなければならない問題、そして後継者育成の面でも、重要な課題であろうと痛感させられたことを報告いたします。

